北海道恵庭市恵み野を事例とした住民の庭づくりに対する意識と取り組みについて

Attitude of the Residents toward Private Gardening in Megumino ,Hokkaido

川根あづさ* 愛甲哲也* 浅川昭一郎*

Azusa KAWANE Tetsuya AIKOH Shoichiro ASAKAWA

摘要：都市域での住宅の庭は住環境・地区環境の良否に関わり、生態的な役割や街並み景観への寄与、コミュニティ形成の媒体としての働きも期待される。本研究では、花づくりが盛んな地域の戸建て住宅地を対象に、住民の庭づくりに対する意識や取り組み、前庭の花づくりの状況を調査し、住民間の相違を探った。その結果、庭づくりの動機としては植物との精神的な関わりが強く、今後望むこととして庭や植物に対する知識があげられた。庭づくりの動機をもとに分類した集団間で自宅の庭のはたらきの認識や庭づくりの際の留意点などに相違がみられ、栽培植物や前庭での花を飾る場所、植え方などの庭の実態にも相違がみられた。

1. はじめに

近年、住まいでのみどりづくりや花づくりへの関心が高まっている。ここ数年のガーデニングブームは女性の参加で活性化しており、園芸、庭いじりは余暇活動の中でも上位を占める¹⁾。庭づくりから得られる効果として庭いじりや食物を得ることだけではなく、日常生活の気晴らしや植物の美的な美しさから得られる喜びといった精神面への効果もあることが知られている²⁾。都市域での住宅の庭は、その居住者に恩恵を与えるだけではなく、街並みの景観や住宅地の環境形成に果たす役割も少なくない³⁾。近年は生き物の生息環境の確保といった役割^{2,3,5)}や、地域のコミュニティの形成媒体としての役割も期待されている。

公的な役割を推進することと私的な庭の利用はけっして矛盾するものではないことが示されているが²⁾、住宅の庭は居住している住民の所有物であり、庭づくりを実際に行う住民の意識や取り組みが庭のはたらきに直接影響する。庭づくり、花づくりをとおしたまちづくりや、生き物の誘因といった公的な役割を、私的空間である住宅の庭に求めるには、住民の庭づくりに対する意識や取り組みに関する情報が不可欠である。

そこで、本研究では、花づくりが盛んといわれる北海道恵庭市恵み野を事例として、住民が庭づくりに取り組むようになったきっかけ・動機などの庭づくりに対して抱いている意識と、実際の世話などの取り組み、その成果である庭の状況を調査した。さらに、庭づくりの動機をもとに住民間の意識の相違および庭づくりにおける取り組みとの関連を検討し、私的な空間である庭の成立に関わる要因と公的な役割を期待する場合の留意点について考察を加えた。

2. 方法

(1) 調査地の概要

恵み野は恵庭市の一部で札幌市の南東約 25km に位置し、札幌圏の都市機能を分担する衛星都市を目指して開発された。調査の対象としたのはその戸建て住宅地で、1980 年から分譲が開始された。面積は 245.7ha、1998 年現在の人口は 13,119 人、4,688 世帯である。1990 年に市が開催した「花と暮らし展」を皮切りに、住民によって「恵み野花づくり愛好会」が結成され、モデルガーデンを紹介した花マップの作成などの活動を行ってきた。そのような取り組みが評価され、1995 年には花のまちづくりコン

クールで建設大臣賞を受賞した。商店街主催のフラワーガーデンコンテストの実施、図書館でのガーデニング講座など、積極的に市民による取り組みがなされている。市民による活動は、全道でも注目され、他地域での花のまちづくりを触発している。マスコミでも紹介され、道内外から観光客が訪れている¹⁾。以上のように当該地区には花づくりや庭づくりに積極的な住民が多いと予想される。しかし、全ての住民が庭づくりに熱心なわけではないと言われており¹⁾、積極的に庭づくりに取り組む層から消極的な層までが存在する地域と予想され、住民の意識や取り組みの相違を把握することも可能だと考えられた。

(2) 調査方法

調査対象として、分譲時期や街路の方位、年齢分布を考慮して 5 地区（面積 82.5ha、戸建て住宅 1,051 軒）を選定した。1998 年 11 月に各地区の 60% の家庭に配布出来るよう、アンケート用紙を配布、直接回収した。回収できなかった世帯には郵送での返送を依頼し、数度訪問しても不在の世帯には依頼文を付け郵送での返送を依頼した。結果として、610 通を配布し、443 通の有効回答を得た（回収率 72.6%）。アンケートは庭づくりの中心となる人物の回答が得られるよう配慮し、回答者は女性が約 6 割、40・50 代がほぼ半数であった。さらに、住民の庭づくりに対する意識が、街路に面した前庭の整備状況にどのように現れるのかをみるため、アンケートに回答した 443 世帯のうち 441 世帯に対し、1999 年 7 月に前庭における花づくりの状況を調査した。

「庭づくりへの意識」として、アンケート調査で、庭づくりの動機や関心、取り組みの熱心さ、住宅や庭をつくる際の景観に関する取り決めへの意見、庭に関する困った点やマイナスの面、これからの庭づくりに望むこと、自宅の庭のはたらきを質問し、「庭づくりへの取り組み」については庭の造成主体や世話時間、除草剤の使用頻度、使用している肥料、庭づくりの際の留意点、花を植える際の配慮、自分の敷地以外での除草や花植えなどの世話の有無、友人などとの種や苗のやりとりの有無について質問した。「実際の庭づくりの状況」については、庭全体での植物、庭石やテーブルなど庭にある構造物、敷地面積および建坪、塀や垣根の有無、高さ、素材をアンケート調査で質問し、境界の外側や境界、玄関の両脇、玄関前のアプローチ、境界内非舗装部分それぞれでの花の有無と植え方、立体的な花の装飾の有無、壁面線後退距離、前庭の方位を現地で調査した。この際、花の植え方は、

*北海道大学大学院農学研究所

地植え、プランター、ハンギングバスケットの3種類とした。現地調査は、主要な出入りが行われている方向の道路側の建物の壁面もしくは玄関までのスペースである「前庭」を対象とした。また「境界」は敷地と道路間の直線上の囲障とし、それらが無い場合は敷地と道路との境界とした。

3. 結果

(1) 庭づくりへの意識

庭づくりに「関心がある」人は91%で、「熱心に取り組んでいる」とした人は29%であった。樹木や花づくり、塀の構造などの住宅や庭を作る際の取り決めに関しては54%が「あった方がよい」とした。困った点やマイナスの面として、「雑草の管理に手間がかかる」87%、「植物の世話や手入れに手間がかかる」68%などが高く認識され、これからの庭づくりに53%が植物や庭についての知識を望んでいた。自宅の庭のはたらきとして高く認識されていたのは、複数回答で「栽培」89%、「実用」76%、「観賞」69%であった。庭づくりのきっかけ・動機について、27の項目でその強さを5段階で求めたところ、「四季が感じられること」や「植物や庭の美しさから得られる喜び」、「育てる喜び、楽しさ」、「心の安らぎ、リラックス」を80%以上の回答者が強く評価していた。公的役割として期待される「街の景観の美しさへの貢献」を強く評価した人は43%であった。

(i) 庭づくりの動機の因子構造

27の動機の評価得点を用いて因子分析を行った。固有値1以上で6因子を抽出し、その際の寄与率が58.7%であったが、主因子解の反復推定後の第4因子以下の寄与率が極めて低くなり、固有値も1を下回ったため、第3因子以上に限ってバリマックス回転を行った。3因子で累積寄与率は48.5%になった。因子負荷量の高い動機の内容から、第1因子から順に「精神的充足」、「交流」、「食べ物」を表す因子であると解釈された(表-1)。

(ii) 庭づくりの動機の因子得点による回答者の分類

バリマックス回転後の3因子の因子得点を用いて非階層的クラスター分析を行い、回答者の分類を試みた。R²値と疑似F統計量の変化率がほぼ安定する4をクラスター数とした。クラスター間の距離は、集団1と集団2の間が2.11、集団1、3間が2.09、集団1、4間が2.18、集団2、3間が2.14、集団2、4間が1.52、集団3、4間が1.90で、集団1は他集団と最も離れていた。

分類された4集団間で因子得点を比較したところ(表-2)、集団1は精神的充足の動機が低く、交流の動機、食べ物の動機も低い全体的に消極的な集団であった。集団2は精神的充足の動機がやや高く、交流の動機が低く、食べ物の動機が高かった。集団3は精神的充足の動機が高く、交流の動機がやや高く、食べ物の動機が低かった。集団4は精神的充足、交流の動機がやや高く、食べ物の動機も高い、全体的に積極的な集団であると解釈された。各集団の人数は順に63、87、116、167人であった。動機をもとに分類した集団間で年代、職業、世帯構成の違いがみられた(表-3)。各集団を比較すると、集団1は20・30代が46%、60代以上が11%と比較的若い世帯で、フルタイムの仕事に就いている人が41%と比較的多く、36%が10歳未満の子供を持っていた。集団2ではパートタイムが26%と他集団より多く、集団3は専業主婦、無職の割合が53%で2番目に多く、集団4は60才以上の家族がいる世帯が55%、専業主婦、無職の割合が66%と最も多かった。

動機をもとに分類した集団間の相違を検討するため意識に関する設問項目とのカイ二乗検定を行ったところ、集団間で、庭づくりへの関心、熱心さ、困った点やマイナスの面、これからの庭づくりに望むこと(庭の広さ、植物や庭についての知識)、自宅の庭のはたらき(栽培、観賞、食料生産)などで意識の違いがみら

れた(表-4)。

庭づくりに対する関心が集団3、集団4で特に高く(図-1)、庭づくりへの熱心さについても同じ傾向であった。住宅や庭をつくる際の取り決めについては、集団3はより肯定的な意見を持ち、集団2は否定的であった(図-2)。集団1は、他集団と比較し、そのような取り決めに「関心がない」人が多かった。困った点やマイナスの面では、集団3、4は集団1、2よりも費用がかさむ

表-1 庭づくりの動機の因子構造

項目	因子負荷量			共通性
	I	II	III	
生命力が感じられること	0.74	0.04	0.17	0.58
育てる喜び、楽しさ	0.73	0.26	0.19	0.64
土に触れることの楽しさ	0.70	0.27	0.24	0.62
四季が感じられること	0.69	0.07	0.13	0.50
植物や庭の美しさから得られる喜び	0.64	0.30	-0.03	0.50
心の安らぎ、リラックス	0.63	0.32	-0.04	0.50
自然に親しみ、学ぶこと	0.58	0.24	0.23	0.44
外で過ごす気持ち良さ	0.55	0.33	0.14	0.43
日常生活の中の気晴らし、ストレス解消	0.54	0.34	0.05	0.41
出来上がったときの喜び、達成感	0.53	0.46	0.05	0.49
自分の趣味の一つ	0.51	0.45	0.07	0.47
ゆとりのある生活	0.50	0.36	0.00	0.38
家族に楽しんでもらうこと	0.46	0.44	0.08	0.42
庭をきれいに保つこと	0.46	0.38	-0.04	0.36
健康のため	0.46	0.32	0.22	0.36
庭に関した話し相手、友人の影響	0.22	0.64	0.03	0.45
友人や家族と共に活動する楽しさ	0.22	0.62	0.14	0.45
庭作りやガーデニングの知識の増加	0.44	0.57	0.06	0.53
近所の人たちとの対話や交流の場となる	0.30	0.56	0.16	0.43
計画をするのが楽しい	0.37	0.56	0.06	0.45
街の景観の美しさへの貢献	0.35	0.46	-0.09	0.34
ひまつぶしの一つ	0.00	0.34	0.13	0.13
生け花やドライフラワー用の花を作る楽しみ	0.32	0.32	0.21	0.25
自分自身の食べ物を生産する楽しみ	0.14	0.06	0.92	0.87
無農薬栽培の食べ物を得る喜び	0.13	0.08	0.88	0.81
収穫の楽しさ	0.19	0.04	0.87	0.79
食費を浮かせること	0.02	0.19	0.69	0.51
寄与率(%)	22.29	14.17	12.04	48.50

表-2 動機をもとに分類した集団間の因子得点の比較

		人数	平均値	F値
第I因子 (精神的充足)	集団1	63	-1.410	a 111.6 ***
	2	87	0.197	b
	3	116	0.525	c
	4	167	0.065	b
第II因子 (交流)	集団1	63	-0.410	b 113.3 ***
	2	87	-0.978	a
	3	116	0.188	c
	4	167	0.533	d
第III因子 (食べ物)	集団1	63	-0.615	b 341.4 ***
	2	87	0.634	c
	3	116	-1.124	a
	4	167	0.682	c

同一記号間には、Scheffeの多重比較検定により有意差はない
***p<0.001

表-3 動機をもとに分類した集団と関連がみられた属性

項目	
年代	0.165 **
職業	0.185 **
10才未満の家族の有無	0.151 *
60才以上の家族の有無	0.172 **
世帯構成	0.187 **

数値はクラメールの連関係数。0~1の範囲をとり、0に近づくほど2変数が独立であることを示す。

**p<0.01 *p<0.05

としていた。また、集団1はこれからの庭づくりに対して庭の広さや庭の知識を望まない傾向があった。自宅の庭のはたらきについては（図-3）、全体に消極的な集団1は自宅の庭のはたらきについての認識が「実用（駐車・物置・せんたくもの干し）」「栽培」

表-4 動機をもとに分類した集団と庭づくりの意識の関連

項目	
庭づくりへの関心	0.285 **
取り組みの熱心さ	0.218 **
住宅や庭をつくる際の取り決めへの意見	0.139 **
困った点やマイナスの面	
・費用がかさむ	0.182 **
・冬の植物の置き場に困る	0.164 **
これからの庭づくりに望むこと	
・庭の広さ	0.149 *
・植物や庭についての知識	0.259 **
自宅の庭のはたらき	
・実用（駐車・物置・洗たくもの干し）	0.071
・緩衝	0.143 *
・プライバシーを守る	0.092
・栽培	0.302 **
・いこい	0.214 **
・観賞	0.308 **
・通風・日照	0.091
・自然との触れ合い	0.285 **
・街の景観を美しくする	0.254 **
・食料を生産する	0.462 **
・子供の遊び	0.102

数値はクラメールの連関係数 **p<0.01 *p<0.05

培」の順に高く、それ以外は40%以下と低かった。食べ物に積極的な動機を持つ集団2、集団4では、共に「栽培」「実用」「観賞」の順に高く、「食料生産」が集団1、3よりも高く認識されていた。「いこい」「街の景観を美しくする」はたらしきについては集団4の方が集団2よりも高かった。精神的充足の動機が高い集団3は「街の景観を美しくする」を最も認識していた。

以上の結果をまとめると、集団1は全体的に動機が低く、庭を観賞やいこいなどのゆとりの場としてよりも、駐車、物置など実用的な場として見ていた。集団2と集団4は食べ物の栽培に関する認識で似ているが、集団4の方が庭づくりへの関心が高く、周囲の景観への関わりについて積極的であった。集団3は最も周囲の景観に対し積極的な意識を持っていた。

(2) 庭づくりへの取り組み

庭づくりの取り組みとして、週当たりの世話時間は「1～2時間」から「3～4時間」が約6割で、「1時間以下」は約2割と少なかった。管理の際「雑草やゴミをなくすこと」に留意している人が約9割と多かった。花を植える際に「道路側から見ても美しいように」配慮している回答者は約6割で、自分の敷地以外での除草や花植えを約7割が行っていた。また、友人や近所の人との種や苗のやり取りを約8割の回答者が行っていた。

動機をもとに分類した集団間で庭づくりへの取り組みにも相違がみられ、世話時間や使用している肥料、庭づくりの際の留意点、花を植える際の配慮などで違いがみられた（表-5）。集団1は庭の造成を業者に委託する傾向があり、世話時間が少なく、除草剤の使用頻度が比較的多かった。集団2、集団4は鶏糞、家庭で作った堆肥をより使用していた。庭づくりの際の留意点について

図-1 動機をもとに分類した集団間の庭づくりへの関心

図-2 動機をもとに分類した集団間の取り決めへの意見

図-3 動機をもとに分類した集団間の自宅の庭のはたらきの認識

表－5 動機をもとに分類した集団と庭づくりへの取り組みの関連

項目	
庭の造成主体	
・家族との共同	0.157 *
・業者	0.174 **
週当たりの世話時間	0.175 **
除草剤の使用頻度	0.117 *
使用している肥料	
・鶏糞、牛糞	0.276 **
・油粕	0.214 **
・堆肥・緑肥	0.218 **
・家庭で作った堆肥	0.249 **
・腐葉土	0.204 **
・骨粉	0.191 **
・配合肥料	0.151 *
庭づくりの際の留意点	
・雑草やゴミをなくすこと	0.137 *
・害虫が来ないようにすること	0.171 **
・できるだけ薬剤を使わないこと	0.236 **
・庭が使いやすいようにすること	0.221 **
・色のコーディネート	0.210 **
・自然に近い形にする	0.085
花を植える際の配慮	0.188 **
自分の敷地以外での除草や花植えの有無	0.198 **
友人や近所の人との種や苗のやり取りの有無	0.176 **

数値はクラメールの連関係数 **p<0.01 *p<0.05

図－4 動機をもとに分類した集団間の庭づくりの際の留意点

図－5 動機をもとに分類した集団間の花を植える際の配慮

は(図－4)、集団1は全般に庭づくりの際の留意点が少なく、集団2、集団4はできるだけ薬剤を使わないように留意し、集団3、集団4は色のコーディネートにより留意していた。花を植える際の配慮として(図－5)、集団2は「自宅から見て美しいように」花を植える割合がより多く、集団3、集団4で「自宅と道路両方から見て美しいように」植える割合が多かった。友人や近所の人との種や苗のやり取りは集団2～4では80%以上であったが集団1では61%と少なかった。

以上をまとめると、集団1は庭の管理に極力手間をかけないようにしており、周囲との関わりも少なかった。集団2、集団4は自然的な嗜好を持ち、集団3、集団4で庭の見た目の美しさへの配慮がみられた。集団4は、自然的な嗜好と庭の見た目の美しさへの配慮を併せ持つが、集団2、集団3ほど顕著ではなかった。種や苗のやりとりは集団1のみで低く、交流への動機が低い集団2においても、交流の動機の高い集団4と変わらずやりとりが行われていた。これより、庭づくりを通じた周囲との関わりは、交流の動機の有無ではなく、庭づくりに対して何らかの動機を有していることによりもたらされることが示唆された。

(3) 実際の庭づくりの状況

庭全体では、低木、園芸種の花が多く栽培されていた。前庭では、境界内非舗装部分での花づくりが86%の家で行われており、玄関両脇では62%、玄関前アプローチ49%、境界28%、境界外が29%であった。花の植え方は境界外では「地植えのみ」が22%と多く、玄関両脇、玄関前アプローチでは「プランターのみ」がそれぞれ56%、30%であった。境界内非舗装部分では「地植えのみ」の57%に続き「地植えおよびプランター」が24%と多かった。ハンギングバスケットの使用は全体において少なく、いずれの部分でも5%を超えることはなかった。立体的な花の装飾を行っていたのは26%で、その半数はプランターによるものだった。前庭のどこにも花がなかった家は6%と少なく、調査したほとんどの家庭で何らかの花づくりがされていることが明らかになった。

動機をもとに分類した集団間で庭全体の状況、前庭での花づくりの状況にも違いがみられた(表－6)。庭全体では低木、野草、芝生を除く植物およびフェンス・トレリス、テーブル・ベンチの有無で相違がみられ、前庭では境界部分を除く4箇所での花の有無および立体的な花の装飾に違いがみられた。集団間の庭全体の植物を図－6に示す。集団1では他集団と比較し、樹木や観葉植

表－6 動機をもとに分類した集団と庭の状況の関連

項目	
庭全体での植物	
・樹木	0.152 *
・低木	0.118
・果樹	0.184 **
・花(園芸種)	0.144 *
・野草	0.133
・観葉植物	0.187 **
・ハーブ	0.149 *
・野菜	0.597 **
・芝生	0.065
・雑草	0.179 **
庭にある構造物	
・フェンス・トレリス	0.175 **
・テーブル・ベンチ	0.163 **
前庭での花づくりの状況	
・境界外の花	0.164 **
・境界の花	0.132
・玄関両脇の花	0.225 **
・玄関前アプローチの花	0.178 **
・境界内非舗装部分の花	0.205 **
・立体的な花	0.205 *
・全体の花	0.195 **

数値はクラメールの連関係数 **p<0.01 *p<0.05

物、野菜などの植物がない傾向があった。集団3と4の相違点は集団4でより園芸品種の花、果樹、野菜があることである。集団2と集団4は集団1、3と比較し、果樹、野菜、園芸品種の花を答える人が多かったが、集団2では雑草のある割合も高かった。また、庭にある構造物としては、集団3、4でよりテーブル・ベンチを庭に置き、フェンス・トレリスを集団3でより置く傾向があった。

次に前庭での花づくりの状況の相違を図-7に示す。玄関両脇、玄関前アプローチ、境界内非舗装部分に集団3でより花があり、他集団よりも立体的な花の飾り方をする傾向があった。集団1はいずれの部分についても他集団よりも花づくりをしない傾向にあり、立体的な花の装飾もしない人が多かった。集団2、4はその中間で、集団2と集団4の間には前庭での花づくりの状況における違いがみられなかった。

まとめると、集団1では庭全体の植物の有無、前庭での花づくりいずれにおいても他集団よりも比率が低く、動機の消極性が実際の庭の状況として現れていた。集団2、4は庭全体で園芸品種の花をつくる傾向があったが、前庭部分においては集団3でより花を植えていることから、集団3の街並み景観に対する積極的な意識が前庭での花の植え方、飾り方に現れているといえる。集団2は、他集団よりも花を植える際に「自宅からみて美しいように」植える傾向があったが、前庭各所の花の植え方において集団4との間で顕著な違いが現れなかった。この理由として、前庭の花の配置には「自宅から」とか「道路から」という意識が影響しない可能性、集団4の「道路から」が、住民が思っているように、花の植え方や飾り方に現れていないこと、また本研究では触れなかつ

た、花の量や色、メンテナンスにその違いが現れている可能性が考えられる。

4. 考察

全体として庭づくりへの高い関心が示され、花を植える際に道路側から見た美しさにも配慮している回答者が多く、実際にほとんどの回答者が前庭での花づくりを行い、花のまちと呼ばれる実態を裏付ける結果が得られた。植物や庭についての知識を望む回答者が多かったことから、庭づくりに積極的に取り組もうとする住民の意識が推察された。一方、自宅の庭のはたらきという点で、「街の景観を美しくする」という項目は十分には認識されていなかった。その理由としては、道路から見ても美しいように花を植えることや前庭での花づくりが住民の考える街の景観美化にまでは到達していない可能性、住宅の庭づくりが街の景観の向上につながるという概念が浸透していないことなどが考えられる。庭づくりの動機としては、「精神的充足」「交流」「食べ物」の3つの因子があることがわかり、それらの動機の積極性および相違により、庭づくりに対する意識、取り組み、前庭での花づくりが異なることが明らかになった。集団毎の動機が意識および取り組み、実際の庭づくりの状況に及ぼす影響について以下に述べ、今後のまちづくりについての課題を考える。

集団1は、クラスター分析において他の集団との距離が遠く、庭づくりへの意識、世話時間などの取り組み、前庭での花づくり

図-6 動機をもとに分類した集団間の庭全体での植物

図-7 動機をもとに分類した集団間の前庭の花づくり状況

についても全般に消極的で、顕著に他集団と異なっていた。他の3集団は、精神的充足、交流、食べ物のうち少なくとも1つ以上を動機として高く持っており、庭づくりに対し何らかの積極性を持っていたのに対し、集団1はいずれに対しても消極的であった。これより庭づくりに最も影響を及ぼす要因が動機の種類よりもむしろ庭づくりに対する積極性であると考えられた。この集団には、フルタイムの仕事に就いている人が多く、10才未満の子供を持つ世帯が多いことから庭づくりにかける時間的余裕がないことが推察され、庭の広さを望まず、庭の管理に時間や手間を極力かけない態度がそれを裏付けている。種や苗のやりとりの少なさ、自宅の庭に対する実用性以外のはたらきの認識の薄さは、庭づくりによる副次的な効果も得られていないことを示している。この集団の障害となっている「時間のなさ」を克服できるような施策、例えば行政や住民間でのメンテナンスの一時的な負担やスプリンクラーの普及、手間をかけずに美しさを保てる庭づくりの方法、情報提供の方法などが今後課題となるだろう。

交流の動機が低く、精神的充足・食べ物の動機が高い集団2は住宅や庭をつくる際の取り決めに対し否定的で、花を植える際に「自宅から見て美しいように」配慮していることから、主に自分のために庭づくりを行っているといえる。樹木、果樹、野菜、雑草が多く、薬剤の不使用、家庭で作った堆肥を使用することなどから庭の美しさよりもむしろ自然性、健康を重視する集団とも考えられる。交流に対する動機が低いにもかかわらず、交流に積極的な集団と同様に種や苗のやりとりが行われており、庭を介したコミュニケーションが無意識的に存在していることを伺わせる。街の景観に資する庭の役割に対しては消極的にもかかわらず前庭各部分での花づくりが行われており、無意識的に街の景観に貢献していると考えられ、この効果を認識することで、この集団の庭づくりは変化する可能性がある。現在恵み野で行われているフラワーガーデンコンテストは、そういった意味で効果的であると考えられる。

食べ物の動機が低く、精神的充足、交流の動機の高い集団3では自宅の庭のはたらきとして街の景観の美しさへの貢献という意識がより高く、住宅や庭に関する取り決めに肯定的であった。庭づくりに際しては色のコーディネートに注意し、花を植える際に自宅からだけでなく道路側から見た美しさにも配慮する傾向があった。そのような意識や取り組みは前庭の各部分での花づくりや立

体的に花を飾るという行為として現れていた。この集団は花のまちづくりを進める上で情報提供者や住民を引っ張っていくリーダーとしての役割を持ちうると思われる。

精神的充足、交流、食べ物全ての動機の高い集団4は、色のコーディネート、花を植える際の配慮など街の景観に対する積極性が集団3に次いで高く、庭にある植物は樹木、果樹、野菜などと、前庭での花づくりも集団2と差がみられなかった。美しさと食べ物の両方を求めて庭づくりをしている層であることがうかがわれる。一方動機の高さが取り組みにはあまり現れておらず、庭の知識をより望んでいることから、知識の不足がこの集団の取り組みを阻害している可能性がある。花をより美しく見せるコツなど、今後の情報提供のあり方により、この集団の今後の花のまちづくりへの貢献が期待できる。

回答者全体として街の景観の美しさに対する動機があまり高くなかったことは、ニュージーランドのクライストチャーチの住民がガーデニングの動機としてリラックスや植物への興味よりも街の景観美化を高くあげている⁶⁾という報告と対照的である。だが恵み野にはクライストチャーチ市にみられるような都市計画条例としての私有地緑化の規制はなく、それにもかかわらず街の景観に対して積極的に取り組む集団が存在することが本研究により明らかになった。動機の相違により、取り組みや庭の植物が異なっていたことから、花のまちづくりを進める上では、住民の嗜好性を尊重することが重要であると考えられる。また、ライフステージの中で、時間の不足などにより庭づくりに熱心になれない時期があることへの理解と、それをサポートするような施策も必要であろう。庭づくりを通じたコミュニティの無意識的な存在は、一軒の家が花づくりをすると、周囲に伝染していくといった例⁷⁾にみられるように、強制的でないゆるやかな花のまちづくりを助けるものとして期待できる。

今回の分析では、住民の意識と現時点での取り組みに重点をおいたが、庭の広さや方位、外構の状況など空間面との関連についても、さらに分析を進めたい。また、今後の課題としては住民の取り組みの違いが植栽の量的、質的な面にどのように現れるか、またどのような花づくり、庭づくりが街並み景観の向上につながるのか、花づくり、庭づくりを通じてコミュニティが形成されるのか、等について検討が必要である。

引用文献

1) 北海道市長会編 (1998) : 第23回北海道都市問題会議 (記録) : 北海道市長会, 札幌市, 109pp
2) 上甫木昭春 (1998) : 居住環境形成に資する戸建て住宅地の庭空間の公的役割に関する研究 : ランドスケープ研究 61(5), 793-796
3) 上甫木昭春 (1999) : 新市街地の戸建

て住宅地における庭空間への生き物誘因の実態と緑地環境形成との関連性 : ランドスケープ研究 62(5), 643-646
4) Kaplan, R. (1973) : Some Psychological Benefits of Gardening : Environment and Behavior 5(2), 145-162
5) 中尾昌宏・服部保 (1999) : 三田市フラワータウンにおける戸建て住宅庭園の

庭園植物の特色 : ランドスケープ研究 62(5), 617-620
6) 杉尾邦江 (1998) : ニュージーランド・クライストチャーチに於ける私有地緑化 (ホームガーデン) の実態 (その1) : PREC STUDY REPORT 2, 62-69
7) (財)余暇開発センター編 (1999) : レジャー白書 '99 : 余暇開発センター, 東京都, 145pp

Summary : In urban areas, private gardens' vegetation contributes to neighborhood environmental quality. Recently, People have expected increased wildlife habitat, improved streetscape, and others tool of community development. To consider these roles, it is important to investigate attitudes of residents regarding their gardens in Megumino, Hokkaido. In order to understand residential perception and management, we carried out a questionnaire survey concerning vegetated flowers in front yards. The results are as follows. The strongest motivation of gardening is the act of planting. Other motivation factors include nonspecified, food production, and increase of family or neighborhood interaction. People wanted more knowledge about plants or gardening. The type of motive about gardening has influenced residents' perceptions, management, vegetation, and front yard flower arrangements.